

報告タイトル (* 日本語と英語両方ご記入ください)

民国外交官の「文革」体験
—陳布雷の「胞弟」陳叔時の物語—
A Former “Min-kuo Diplomat” Experience of the “Cultural Revolution” in China
—The Story of Chen Shu-shi, Chen Bu-lei’s “Younger Brother”—

氏名(所属)

川島 真(東京大学)
KAWASHIMA Shin (University of Tokyo)

要旨(800字程度)

本報告は、主にスタンフォード大学フーバー研究所アーカイブ所蔵の Chen Shushi Papers (Collection Number:2015C47)を用いて、中華民国期に外交官でもあった陳叔時(陳布雷の胞弟)の文化大革命体験を考察しつつ、同時にこのような海外に流出した文書のもち史料的意義について考えるものである。

中国外交史研究でもしばしば言及されるように、民国期に外交官としての経験を有する人物のうち少なからぬ者が1949年10月の中華人民共和国成立後に中国共産党側に「起義/投匪」した。凌其翰や涂允檀などがその代表例だろう。だが、こうした人物が継続して外交官であり続けようとしても往々にしてそれは困難であり、この陳叔時がそうであるように、多くの者が大学の外国語教員などとして所期の目標を放棄せざるを得なかった。しかし、彼らの「過去」は中国の政治状況が左傾化するたびに問題視されて次第に表舞台から姿を消し、特に文化大革命の時には陳叔時も含め多くのかつての民国外交官たちが過去を理由に糾弾された。

先行研究では、民国期と人民共和国期との間の外交人材の断絶性がすでに指摘されているものの、その断絶の具体的な意味、また全く継承性がなかったのか否かといったことは十分に検討されてはいない。そこで本報告では、陳叔時を事例として「帰国」の経緯、帰国後の状況、文化大革命で問題とした経歴、待遇、そして文革終結以後の遺族による陳叔時の「名誉回復」の経緯とそこでの課題などについて考察する。

なお、本報告では中国外交史の視点からの考察だけでなく、現代中国における「歴史」の意味、特にそれが決してイデオロギーの問題としてだけではなく、個人の身の安全にも深く関わる問題であったこと、またそうであるからこそ、このような個人文書が海外に流出することになるということについても合わせて検討したい。